



《マルカデ通り》1909年 油彩／カンヴァス 60.3×81.3cm 名古屋市美術館

2025.9.20 sat — 12.14 sun
Press Release

モリス・ ユトリロ展

Maurice Utrillo



SOMPO美術館
Sompo Museum of Art

20世紀初頭のパリの街並みを描いたことで知られる風景画家モーリス・ユトリロ(1883-1955)は、生まれ育ったモンマルトルや暮らした郊外の風景を数多くの油彩画に残しました。画家としての歩みには、母シュザンヌ・ヴァラドン(1865-1938)をはじめとする家族との複雑な関係や、幼少期からのアルコール依存といった要素が絡み合い、独自の世界観を築き上げています。波乱に満ちた人生を送りながらも、20世紀前半の美術界を席卷したこのエコール・ド・パリの画家は、とりわけ日本において現在もなお根強い人気を誇っています。

本展は、フランス国立近代美術館(ポンピドゥセンター)の協力のもと、同館所蔵の《モンマニーの屋根》(1906-07年頃)や《ラパン・アジル》(1910年)を含む作品約70点と、アーカイヴを管理するユトリロ協会から提供された資料を通して、その全貌に迫ります。アルコール依存症の治療の一環として絵筆をとった「モンマニー時代」、さまざまな素材を用いて白壁の詩情を描き出した「白の時代」、そして鮮やかな色彩を駆使した「色彩の時代」をたどりながら、ユトリロが確立した唯一無二の様式と、彼が愛した風景の詩情を感じていただける展覧会です。

展覧会の見どころ

1 ユトリロの初期作品から晩年の作品までを紹介し、 画家の全貌にせまります

「モンマニー時代」の初期作品、最も充実していると評価される「白の時代」の作品を中心に、晩年の「色彩の時代」まで、作家の画業の全体を振り返ります。また、ユトリロ協会から提供される資料もあわせて展覧します。

2 ユトリロの生涯、制作、日本での評価の高まりについて、 5つの視点から解説します

5つのテーマから、ユトリロの生涯と作品、そしてその受容を理解するうえで重要な視点を提示し、従来では見過ごされがちであったユトリロ像を浮かび上がらせます。

3 《ラパン・アジル》のヴァリエーション——同じモチーフを執拗に 描き続けたユトリロの制作方法を紹介します

異なる時期に描かれた複数の《ラパン・アジル》(モンマルトルに所在するキャバレー)をモチーフとした作品を比較することで、ユトリロがどのように風景と向き合ったのかを検証します。

モーリス・ユトリロ(1883-1955)

画家シュザンヌ・ヴァラドンの私生児として生まれ、7歳のときにスペイン出身の画家・批評家ミゲル・ウトリリョ(ユトリロ)に認知されてその姓を名乗るようになります。中学校卒業後はさまざまな職を転々とするなかでアルコール依存症が悪化し、その療養の一環として絵画制作を始めました。ピサロやシスレーの影響を受けて厚塗りの画面を志向したのち(「モンマニー時代」、1909年頃からパリの街の白壁を独自のマチエールで表現し、アカデミックな絵画とは一線を画す作風を確立します(「白の時代」)。その独創的な表現や半ば抽象化された画面空間により、エコール・ド・パリのなかでも特異な存在として高く評価されます。晩年は鮮やかな色彩を使用した素朴な作品を多く残しました(「色彩の時代」)。本年はユトリロの没後70年にあたります。

Chapter. 1

モンマニー時代

ユトリロは、印象派の画家（ピサロやシスレー）の影響のもと、住まいのあったモンマニーの風景を描くことから画家として出発しました。小高い場所から屋根の連なる風景と木々を描いた作品は、その後の作品を構成する自由な線と直線・色面からなる絵画の出発点をなしています。

1 | 幼少期と青年期に思いをはせる

モーリス・ユトリロの芸術的出発点に焦点を当て、彼の幼少期が後の画風や創作にどのような影響を与えたのかを探ります。アルコール依存や精神的不安定さという困難を抱えながらも、母親であるシュザンヌ・ヴァラドンの愛情と支えのもと、画家としての道を歩み始めたユトリロ。彼が育ったモンマルトルやモンマニーの風景は、彼の独特な詩情あふれる都市風景画の原点となったことを示唆しています。本テーマでは、初期作品や家族との関係を通して、ユトリロという画家の原風景に迫ります。

広報用画像1

《モンマニーの屋根》

1906-07年頃 油彩／カンヴァス 65×54cm
ポンピドゥセンター／国立近代美術館・
産業創造センター
© Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist.
GrandPalaisRmn / Bertrand Prévost /
distributed by AMF

パリ近郊の小村モンマニーは、1896年にヴァラドンと結婚した銀行家ポール・ムーリスが邸宅を構えた地であり、若きユトリロはこの地とモンマルトルとを行き来する。本作で画家の関心は純粋な自然描写へは向かわず、俯瞰して捉えた屋根の連なりとその合間に繁茂する木々との一体感を、緑を基調とする色彩の調和と印象派を思わせる動きのある筆触によって描き出そうとしている。画面全体を覆う緑のなかに、オレンジ、黄、青を散りばめつつ、また筆触の大きさや動きによっても確かな空間的奥行きを生み出している点からは、ユトリロ独自の色彩感覚と空間構成の力量がうかがえる。



2 | ユトリロと日本をめぐる短い歴史

ユトリロの作品は20世紀初頭から日本でも紹介されはじめ、1950年代以降、その都市風景は多くの人びとを魅了してきました。日本各地で開催された展覧会や、美術館・個人による収集活動を通じて、その人気と評価は着実に高まり、現在ではユトリロの絵画は日本の美術ファンにとっても親しみ深い存在となっています。本テーマでは、ユトリロと日本との出会いの歩みをたどりながら、文化的受容の過程を振り返ります。



広報用画像2

《サン＝ドニ運河》

1906-08年 油彩／紙 53.4×74.5cm 石橋財団アーティゾン美術館

本作は、エコール・ド・パリの日本への紹介者として知られる福島繁太郎によって1929年以前に日本へもたらされた作品である。また、ブリヂストン美術館（現・アーティゾン美術館）を設立した石橋正二郎の絵画コレクションに最初期に収蔵された作品の一つであり、今日のユトリロについての評価とは異なる文脈、すなわち、印象派作品の収集の一環として購入された経緯が確認されている*。均質化された筆触の塗り重ねによって構築された風景は、ピサロの影響のもとで制作されたことを示す一方で、パリ郊外の運河沿いに広がる工場とそびえ立つ煙突のやや歪んだ描写、さらにピサロが晩年に主題とした都市化する郊外風景への関心がうかがえる点からは、ユトリロ独自の様式の確立と、彼が繰り返し描く都市モチーフの出現を同時に予感させる。

*『石橋正二郎とブリヂストン美術館』2012年、石橋財団ブリヂストン美術館編、32-33頁

Chapter. 2

白の時代

パリの街並みに目を向けた画家が、漆喰^{しっくい}でできた壁の質感を巧みに表現した時代です。より構成的な画面を志向し、様々な表情に満ちた白色の表現により、わずかにいびつな構図の街並みのなかにリアルな質感をもたらすことで、画家としての名声を高めました。

3 | 壁の質感を味わう

ユトリロの絵画において特徴的な「壁」の描写に注目します。彼が描いた街角や建物の壁面には、ひび割れや汚れ、風化の痕跡が丹念に描き込まれており、単なる背景以上の存在感を放っています。石膏や砂などの素材を用いた独自の技法は、視覚のみならず触覚に訴えかけるような物質感を作品にもたらしました。これらの壁は、ユトリロが見つめ続けたモンマルトルの現実であり、同時に彼自身の内面風景をも反映しています。代表作を通じてその絵肌の豊かさと感情の深みを読み解き、ユトリロ芸術の核心に迫ります。

広報用画像3

《マルカデ通り》

1909年
油彩／カンヴァス
60.3×81.3cm
名古屋市美術館



マルカデ通りはパリ18区に所在し、中世に定期市（ラテン語でmarcadus）が開かれていたことに関連して名付けられた。ゆるやかに下る道の形状にあわせて、描かれる左側の建物の一階部分も少しずつ律動的に段差を描く構造を示している。道は途中で左に向かってカーブし、ユトリロの他の多くの作品の場合と同様、視線は絵画空間内にとどまることを強えられる。人物は、道端に佇む二人組や、中央に描かれる馬車の御者もふくめ、奥へ奥へと誘導されるわれわれの視線とともに退いていくかのようだ。

《可愛い聖体拝受者、トルシー＝アン＝ヴァロワの教会（エヌ県）》

1912年頃 油彩／カンヴァス 52×69cm 八木ファインアート・コレクション



この「白の時代」の代表作では、ややくすんだ青空の下、白い壁の小さな教会が画面中央に静かに佇む。人物の姿は描かれず、画面全体が静寂に満たされている。建物の輪郭にはやや硬質な描線が見られるが、白を基調とした柔らかな色調とマチエールが、画面に澄んだ印象を与えている。画面に姿を現さない聖体拝受者——イエスの血と肉を初めて受け取る少女の姿は不在のままであり、白く小さな教会の姿に重ね合わされている。その不在が観る者の想像力を喚起し、作品に象徴主義的な深みを与えているといえるだろう。ユトリロの信仰は、当時のフランス社会において政治的・国民的象徴として機能していたカトリック信仰の枠組みにとどまる世俗的なもので、まさにその点において、ユトリロの作品は広く大衆に受け入れられる力を持ち得たともいえる。

《廃墟の修道院》

1912年 油彩／カンヴァス 61×82cm ポンピドゥセンター／国立近代美術館・産業創造センター（モンマルトル美術館寄託）

© Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. GrandPalaisRmn / image Centre Pompidou, MNAM-CCI / distributed by AMF

ブルターニュ地方のフィニステール県にあるサン＝マチュ修道院の廃墟を描いている。崩壊しかかった石造りのアーチや壁面はユトリロ特有の厚塗りの白で描かれ、建物の質感や、岸壁に建てられた修道院が被った時間の積み重なりが表現されている。実際の修道院の石造りの壁はここまで白くなく、白黒の絵葉書をもとに描かれているため色彩は現実の風景を再現していない。ユトリロ自身による自然観照の乏しさを感じるのはそのためだろうか。



4 | 《ラパン・アジル》—— 制作方法を知る

ユトリロが繰り返し描いたモンマルトルの象徴的なキャバレー《ラパン・アジル》を題材に、彼の制作方法や表現の変遷を探ります。異なる時期に描かれた複数の《ラパン・アジル》を比較することで、構図や色調、筆致、質感の違いが明らかになり、ユトリロがどのように風景と向き合い、再解釈を重ねていったのかが浮かび上がります。写真に基づいた忠実な再現から、記憶や感情を交えた詩的な表現へと至るプロセスをたどることで、ユトリロ特有の視点と絵画的思考に触れます。



広報用画像6

《ラパン・アジル》

1910年 油彩／カンヴァス 50×61.5cm ポンピドゥセンター／国立近代美術館・産業創造センター
© Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. GrandPalaisRmn / Bertrand Prévost / distributed by AMF

「跳ね兎」を意味するこのキャバレーの経営者は母ヴァラドン知人の知人であり、ユトリロ自身も足繁く通った店の一つであった。ユトリロが絵葉書をもとに繰り返し描いたモチーフであり、多数のヴァリエーションが存在するが、本作はそのなかでも最初期の作例にあたる。伝記作家タバランは、この時期のユトリロについて「1日に1度酩酊し、1日に1点名作を描いた」と書いている。本作では、建築物の輪郭線が明確に引かれ、線的な遠近法が試みられている。しかし、色彩の積み重ねによって生み出された、迫り上がるような小径や空、木々、さらには押し込まれるように描かれた人物の表現によって、画面にはわずかな歪みが生じ、独特な絵画空間が生み出されている。

Chapter. 3

色彩の時代

画家としての絶頂期にあったこの時代に、ユトリロは街並みの写真を参照しながら、定規やコンパスを使って下描きをし、彩度の高い色彩を選び制作をすすめました。これらの作品群からは、現実の風景を描きながらも、その現実から距離をとり、絵画の空間や人物が抽象化、記号化する様子を見て取ることができます。

5 | 女性の描き方

ユトリロの人生と作品における「女性」という存在に焦点を当てます。生涯にわたり深い影響を与えた母ヴァラドンをはじめ、彼の傍らにいた女性たちは、ユトリロの芸術的成長や精神の揺らぎにおいて重要な役割を果たしました。画中に頻繁に登場する女性像は決して主題の中心ではないものの、街角の静かな佇まいや孤独の気配を象徴する存在として描かれています。また、結婚後のおだやかな時期に描かれた作品には、どこか柔らかく、明るさを帯びた表情が見られます。本章では、ユトリロにとっての「女性」がどのような存在であったのかを、私生活と作品の両面から読み解いていきます。

広報用画像7

《シャラント県アングレム、サン＝ピエール大聖堂》

1935年

油彩／カンヴァス 111×130.5cm

公益財団法人ひろしま美術館



ユッテルと離別し病に伏したヴァラドンは、病床から旧知のベルギーの銀行家の未亡人、リュシー・ポーウェルを呼び、彼女とユトリロを結婚させようと画策する。1935年、2人は結婚し、フランス中部アングレムにあるリュシーの家に落ち着き、平穏な生活を送る。ユトリロ51歳のときのことである。本作はそのアングレムのシンボルである教会を描いたもの。ユトリロはしばしば宗教建築を描き、その多くは陰鬱な雰囲気の中に佇んでいるが、本作では明るい画面が展開されている。まるで書割^{かきわり}のように水平に展開される空の表現と、地面から垂直に立ち上がる教会のファサードの構成をはじめ、「色彩の時代」の彩度の高い色彩と、プリミティブな描写が詰め込まれた作品である。

会期中のイベント

各イベントの詳細は美術館ホームページで随時公開します

■ 学芸員のギャラリートーク【自由参加】

9月26日（金）18:30-19:00、10月1日（水）11:00-11:30

本展担当学芸員が展覧会の見どころや出品作品について展示室で解説を行います（展示フロアを移動しながらマイクを使用して説明します）

参加方法 | 時間になりましたら5階展示室入口へお集まりください 参加費 | 無料

※ただし、本展への入場が必要です

■ ギャラリー★で★トーク・アート【要申込】（定員30名）

11月10日（月）14:00-16:00

休館日に貸し切りの美術館で、ボランティアガイドと話をしてみませんか？

作品解説を聞くのではなく、参加者が作品を見て、感じて、思うことを話しながら楽しむ参加型の作品鑑賞会です

参加方法 | web申込／9月19日（金）10:00より美術館ホームページにて受付開始 参加費 | 1,800円（税込）

※高校生以下無料 ※ご招待券、ご招待状、年間パスポート、割引等は適用できません

■ 収蔵品コーナー

フィンセント・ファン・ゴッホ《ひまわり》、ほか

展覧会名	モーリス・ユトリロ展 Maurice Utrillo
会期	2025年9月20日（土）—12月14日（日）
会場	SOMPO美術館 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
開館時間	10:00-18:00（金曜日は20:00まで）※最終入場は閉館30分前まで
休館日	月曜日（ただし10月13日・11月3日・11月24日は開館）、10月14日、11月4日、11月25日
観覧料（税込）	一般（26歳以上）／事前購入券1,700円、当日券1,800円 25歳以下／事前購入券1,100円、当日券1,200円 高校生以下無料 身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳（ミライロIDも可）を提示のご本人とその介助者1名は無料、被爆者健康手帳を提示の方はご本人のみ無料 ※年齢は入場時点 ※25歳以下の方は入場時に生年月日が確認できるものをご提示ください ※事前購入券は7月22日（火）10:00から販売開始、公式電子チケット「アソビュー!」、イープラス、ローソンチケット（Lコード：33492）、チケットぴあ（Pコード：687-258）などでお買い求めいただけます ※事前購入券は手数料がかかる場合があります
主催	SOMPO美術館、朝日新聞社、テレビ朝日
特別協賛	SOMPOホールディングス
特別協力	損保ジャパン
協力	日本航空
後援	在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ、新宿区
企画協力	IS ART INC.



SOMPO美術館
Sompo Museum of Art

<https://www.sompo-museum.org/>

050-5541-8600（ハローダイヤル） アクセス：新宿駅西口より徒歩5分

今後の状況により、本展の会期や内容の変更、または臨時休館する可能性があります。
最新情報は美術館ホームページ等でご確認をお願いします

© Hélène Bruneau 2025

プレスお問合せ

「モーリス・ユトリロ展」広報事務局（共同PR内）

担当：三井

e-mail utrillo-sompo-pr@kyodo-pr.co.jp

TEL. 03-6264-2382

〒104-0045 東京都中央区築地1-13-1

銀座松竹スクエア10階